

第4回アジア作物学会議に参加して

萩原素之*

(信州大学農学部)

2001年4月24日から27日まで、フィリピンのマニラでアジア農業会議 (Asian Agriculture Congress) が「Food security and environment protection in the new millennium」の統一テーマで開かれた。本会議は、第9回 SABRAO (Society for the Advancement of Breeding Researches in Asia and Oceania) 会議、第4回 ACSA (Asian Crop Science Association) 会議および第16回 FCSSP (Scientific Conference of the Federation of Crop Science Societies of the Philippines) 会議の3つが合同開催されたものである。

1. 参加者数

主催者に尋ねたところ、参加者は300人余りで、その半数余りがフィリピン国内からの参加者とのことであった。3つの会議の合同なので参加者数はもう少し多いかと思っていたのだが、昨年来のフィリピンの政情不安が災いしたのかもしれない。フィリピン国内参加者のうち、1/4位はIRRI (国際イネ研究所) 関係者ではなかったかと思われる。ちなみに、日本人参加者は約40人であった。IRRIなどフィリピン滞在の日本人参加者10人弱はおそらくこの数字には含まれていなかったと思う。いずれにしても、日本からの作物学会員の参加者は過去2回の海外で開催された Asian Crop Science Congress に比べると、今回はやや少なかったように思われる。一方、今回は全体としては女性の参加者がこれまでより多かったように思われた。フィリピン人参加者に女性が多かったようだ。

2. 招待講演者による本会議

3日間の会期のうち、午前中はすべて本会議 (plenary session) にあてられ、「作物の生産性と持続性の向上」(Enhancing crop productivity and sustainability)、「動物生産と持続性の向上」(Enhancing animal productivity and sustainability)、「食糧確保と環境保護のためのバイオテクノロジー」(Biotechnology and environment protection)、「食糧確保と環境保護のための公-私企業共同および情報テクノロジー (IT)」(Public-private sector partnerships and information technology for food security and environment protection) の4つのテーマでセッションがもたれた。初日には、国分牧衛氏 (東北大学)、Khush 氏 (IRRI) ら3人が作物生理や育種の立場から今後の研究の方向性について講演した。Khush 氏は New Plant Type について少しは触れるかと思ったが、もっぱら耐病性や不良環境耐性の導入に関する話に終始した。2日目はまず動物生産関係のセッションで、ILRI (国際家畜研究所) 所長 Fitzhugh 氏によるソルガム生産における堆肥施用の効果などの講演があり、Make Livestock Revolution Work for the Poor (貧しい人々のための家畜革

命) という ILRI の2010年までのスローガンを紹介していた。続く、バイオテクと環境関連のセッションでは、バイオテクは生物多様性を減少させるとよく言われるが、バイオテクなどで生産性が向上すれば農地拡大の必要性が低下し、その結果、生物多様性の減少を防ぐ効果がありうると述べていた。また、サステイナビリティを評価するためのモニタリングツールが必要だが、これにはバイオテクの活用場面が考えられるといった話も出ていた。3日目は朝ちよつと遅く会場に出かけたので省略する。ちなみに、会議は毎朝8時からであったが、フィリピンでは朝は早いのが特別ではない。

3. 口頭発表

一般の口頭発表は全部で70ほどあった。これらは3会場に別れて同時進行で行なわれ、詳しく紹介できないので、セッション名を挙げるに留める。

- 作物の生産性と持続性の増大のための遺伝的改良
- 自然資源の管理
- 作付け体系と環境保護
- 生産性と持続性向上のためのイネのバイオテク
- 生産性向上と環境保護のためのアジア農業における遺伝子組換え体
- 食料確保と環境保護のための公-私企業共同および情報テクノロジー
- プランテーション作物の改良と管理

上記のうち「生産性向上と環境保護のためのアジア農業における遺伝子組換え体」のセッションはモンサント社がスポンサーとなっていた。モンサント関係者による発表が2件あり、遺伝子組換え作物の安全性の評価をどれほどシステマティックかつ精密に行なっているかを非常に念入りに解説していた。取り沙汰されている危惧については、実際にはあり得ない条件下で得られた結果で、問題にならないというような説明があった程度で、危険性の指摘をひとつ一つ取り上げて反論するものではなかった。会場から若干批判的な質問があったものの、スポンサーがモンサント社とあっては、一方的な安全性宣伝の場との印象の拭えないものであったのは致し方ないであろう。

なお、発表の大半がいわゆるプレゼンテーションソフトを使い、コンピュータ画面をプロジェクターで映していた。時にトラブルが見受けられたが、どれも工夫され、見栄えよいものであった。作物学会講演会においても、プレゼンテーションソフト利用への対応は急ぐべきと思う。一方、会場では頻繁に携帯電話の着信音が鳴り、主催者も注意を促していたが、これはハイテクのマイナス面であった。ちなみに、フィリピンでは固定電話の設置に非常に時間がかかることもあって、携帯電話の普及が急速に進んで

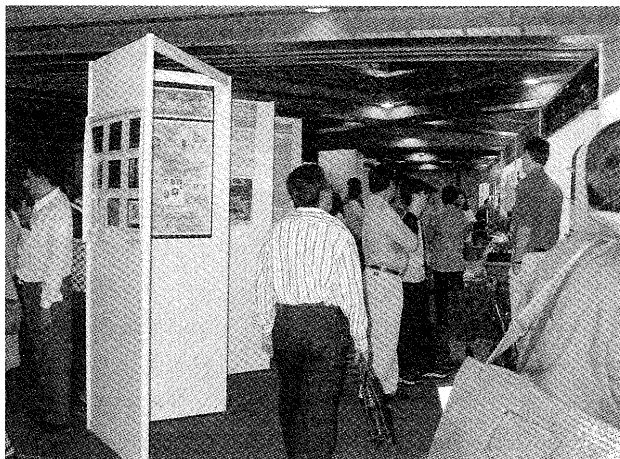


写真1 ポスター発表会場風景。

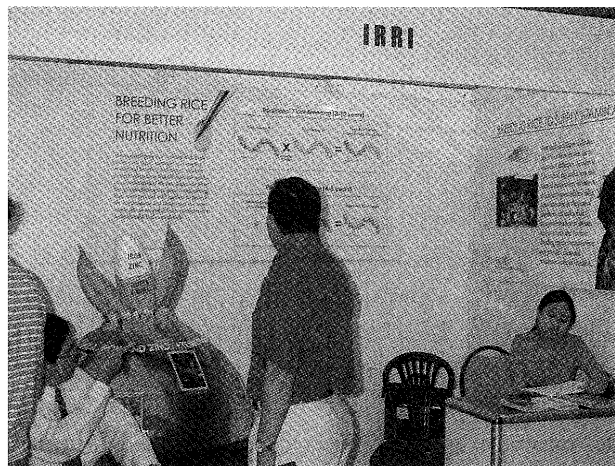


写真2 IRRIのブース。

いる。

4. ポスター発表

発表件数はプログラムによれば218あったが、キャンセルされたものもあり、実数は200を切っていたようだ。ポスターは3日間の会期中ずっと掲示されていたため、じっくりと見て回る時間があった。動物関係のものはごく少なく、作物の遺伝・育種関係55題、作物生理25題、イネのバイオテク25題、作付け体系・環境保護20題、プランテーション作物の改良13題などが多かった。

5. その他

フィリピン作物学会のベストポスターセッションではベストポスターに選ばれた3題の発表があった。数百のポスターから審査で選ばれたとのことで、いずれも充実の内容であった。1つはマンゴーの体細胞不定胚形成のための新しい培地の開発に関するもので、従来の培地に比べて極めて簡便な培養を実現したという。2つめはIR 64の薬培養とその後代の特性などに関するもので、従来難しかったというIR 64の薬培養に成功し、品質面で優れるIR 64を用いた品種改良の効率化に寄与するものであるという。3つめは稲作における生物多様性に関わるもので、間作によって、小規模な自給的農業だけでなく、大規模な商業的農業においても生物多様性の確保が可能であることを実証する圃場試験の結果を紹介していた。

6. 次回開催地

会議2日目に次回の第4回国際作物学会議(ICSC)の開催に関する宣伝のセッションがあった。次回ICSCはオーストラリアのブリスベンで開催されることになっているが、オーストラリア代表は10分程度のプロモーションビデオを流して宣伝する熱の入れようであった。会期は2004年9月27日～10月1日と発表され、同時に開催案内のホームページも紹介された。現在はまだ簡単な紹介と予備登録のページだけだが、今後徐々に充実されるだろう。URLは下記の通り。

<http://www.cropscience2004.com/>

なお、第5回アジア作物学会議(ACSC)も2004年開催となるため、オーストラリアはICSCとACSCとの合同開催をACSA理事会に提案すると言っていた。この結

果については最終日のclosing ceremonyで発表されたものと思うが、筆者はclosing ceremonyには出ず、IRRIに向かったので結果を知らない。おそらく、合同開催に決まったと想像するが。

会期終了後、フィリピン大学ロスバニョス校とIRRIへのフィールドツアーがあった。筆者はこれより一足先にIRRIに向かったのだが、参加者は数十人であったとのこと。この日は幸い、エストラダ前大統領の逮捕に伴う騒乱の影響を受けることもなく、交通は順調だったようだ。IRRIのジーンバンクなどが見学対象になっていた。

紙面に若干の余裕があるので、雑感を書いてみたい。筆者は1999年11月～2000年8月まで文部省在外研究員としてIRRIに滞在していたので、フィリピンは約8カ月ぶりであったが、ホテルやショッピングモールで手荷物検査をしていて驚いた。昨年春ごろマニラ首都圏で爆弾テロが相次いだ頃から行なわれていたが、まだ続いていたとは。イスラム系などの反政府勢力との紛争はIRRI滞在中に一時は国軍の半数を投入したともいわれる程に拡大したが、今年に入ってから、比較的落ち着いていたようなのに、年末にマニラ首都圏で久しぶりに爆発事件があったためか。ただ、検査といっても、効果があるとは思えない程度のものである。

通常マニラ近辺では4月は乾期の終わり近くで、最も暑い時期である。しかし、会期中は乾期らしいとは言い難い天候で、雲が広がりがちで雨がぱらついたこともあった。暑さや日差しが思ったほどでなかったのは、外出には助かった。昨年は天候不順で乾期にかなりの降雨があり、ラニーニャ現象の影響とも言われていた。今年は去年のような天候不順ではないと聞いた。会期中だけの異変だったのかもしれないが、地球温暖化の影響はないのだろうか。筆者の住む伊那でも、昨冬は稀にみる降雪を記録した。温暖化は天候不順という形でも農業生産を不安定にさせるのではないかと恐れる。

フィリピンの海を久しぶりに楽しむことは今回叶わなかったが、3年後のオーストラリアのゴールドコーストやグレートバリアリーフに思いを馳せながら、フィリピンを後にした。発表のネタ作りが先決と思ひ直しつつ。